

研究動向

琉球葬制の研究史

牛窪 彩絢*

はじめに

琉球における葬制に関する研究は、1920 年代に民俗学分野から花開き、70 年代以降に考古学、80 年代以降に歴史学が追随し、豊富な成果が蓄積されてきた。しかし、葬制研究に限ったことではないが、各分野の連携や学際的研究が必要であると言われるにも関わらず⁽¹⁾、その実現は容易いものではなく、琉球葬制においては 1986 年に開催された「南島の墓」シンポジウム⁽²⁾以来、同企画を超えるものは無かったと言える⁽³⁾。考古学の側からはモノとしての「墓」に関する思想・宗教など形而上の観念を読み解く試みも行われてきているが⁽⁴⁾、一方で民俗学の側からは、歴史学的視点への配慮なしに沖縄民俗を論じることの危険について指摘されてきたにも関わらず⁽⁵⁾、積極的な応答を行えていないのが実情のようである⁽⁶⁾。よって本稿では、学際的研究を少しでも進展させることを願い、思想史や文献学を方法論的視点として持ち合わせる宗教学という筆者の立場も活かすことで、各分野横断的に琉球葬制研究の動向を記述することを試みる。

具体的には、上述の「南島の墓」シンポジウムの構成に倣い、本稿でも葬制研究を民俗学、考古学、歴史学に区分し、各分野及び隣接諸科学での研究動向を通史的に紹介する。

* 東京大学宗教学研究室博士課程 2 年。

⁽¹⁾ 例えば、柴田実「葬制の問題に寄せてー考古学と民俗学の間ー」、『中世庶民信仰の研究』角川書店、1966 年。

⁽²⁾ 沖縄県地域史協議会が主催。同シンポジウムの報告書が『シンポジウム 南島の墓ー沖縄の葬制・墓制ー』（沖縄出版、1989 年）として刊行されている。

⁽³⁾ ただし、沖縄県立博物館・美術館が 2015 年に開催した特別展「琉球弧の葬制ー風とサングの吊いー」の解説図録（沖縄県博物館・美術館、2015 年）には、一般向けの説明に加え、各分野の研究者による論考も掲載されており、琉球葬制の全体像を捉えるのに大変有用なものと言える。

⁽⁴⁾ 例えば、坂詰秀一『歴史と宗教の考古学』吉川弘文館、2000 年、松原典明編『近世大名墓の考古学ー東アジア文化圏における思想と祭祀ー』勉誠出版、2020 年。

⁽⁵⁾ 例えば、小川徹「王国末期農村における家祭祀体系の形成ー我部祖河文書の紹介と民俗誌的考察（2）ー」『沖縄文化研究』4 巻、法政大学沖縄文化研究所、1977 年、56 頁。また、安良城盛昭や高良倉吉も、民俗事象を社会体制や王府の政策との関わりの中で捉える必要性を指摘している（安良城『新・沖縄史論』沖縄タイムス社、1980 年、13-14 頁。高良「琉球史研究からみた沖縄・琉球民俗研究の課題」『民族学研究』61 巻 3 号、日本民族学会、1996 年、61-63 頁）。

⁽⁶⁾ 赤嶺政信「沖縄の民俗研究史」『沖縄県史 各論編 9 民俗』沖縄県教育委員会、2020 年、21 頁。

なお、同シンポジウムの報告書には玉木順彦作成の「沖縄・奄美の葬制に関する主要文献目録」が掲載されており、1994年には渡名喜明が『琉球列島宗教関係資料総合目録』⁽⁷⁾にて葬制を含む宗教関係の主要図書と論文の一覧を掲載している。本稿では筆者の能力不足もありここまで網羅することはできないものの、記述する中でこれらの目録を現代の研究を含むものにアップデートできればと思う。また、目録の作成ではなく研究史の記述を試みる本稿は、全体的な研究動向の把握に関してより有用なものとなるだろう。筆者の立場上、民俗研究史の記述が最も厚くなることが予想され、他分野においては見落としも多分にあると思われるが、寛容いただければ幸いである。近現代にかけて外国人研究者も多いが、本稿では研究史上の位置付け含め十分な検討が間に合わなかった。宮古・八重山などの地域史や沖縄内部での地域差にも十分な目配せが出来なかった。今後の課題としたい。

1. 沖縄の民俗研究史の概要

各分野での研究動向に入る前に、本章において、まず葬制研究を含む沖縄の民俗研究史について全体像の把握を行いたい。

冒頭で触れたとおり、琉球葬制に関する研究は民俗学分野から花開き、考古学、歴史学が追随し、現在では後者2つがより活発と言える状況である。民俗学から開花したとされる所以は、1927年に発表された伊波普猷の「南島古代の葬制」⁽⁸⁾が琉球葬制研究の嚆矢と位置付けられているからであり⁽⁹⁾、後述するが、柳田國男が来島し、沖縄民俗研究の機運が高まりを見せ始めるのもこの時期だからである。これに比べ、沖縄考古学会ができたのは昭和40年代の半ば(1969年)であるため、民俗学よりかなり後発する。ただ、「南島の墓」シンポジウムの時点で考古学は既に葬制において「めざましい発掘成果」が見られると評されるに至っている⁽¹⁰⁾。その後も開発事業に伴い発掘調査が進み、2003年には浦添市において近世墓シンポジウム「墓からわかる家族の歴史」⁽¹¹⁾が開催され、『考古学ジャーナル』では「南西諸島の古墓」を特集(2006)、沖縄考古学会でも“近世墓”⁽¹²⁾についての研究発表会が行われる(2013)等、現在に至るまで活況を呈している。歴史学は1990年代時点で「ようやく葬制について関心が高まりつつある」という自己認識であるが⁽¹³⁾、最も後発であるが故に、文献資料中の事例・条文、墓碑、墓誌、発掘報告に伴う多

⁽⁷⁾ 渡名喜明『琉球列島宗教関係資料総合目録』榕樹書林、1994年。

⁽⁸⁾ 伊波普猷「南島古代の葬制」『日本考古学論集9 北方文化と南島文化』吉川弘文館、1987年(初出は1927年)。

⁽⁹⁾ 前掲註2、12頁や、仁王浩司「沖縄における儒教の実践」『近世大名墓の考古学』勉誠出版、2020年、291頁。古谷野洋子『八重山離島の葬儀』榕樹書林、2019年、5頁。

⁽¹⁰⁾ 前掲註2、208頁。

⁽¹¹⁾ 『浦添市文化財調査研究報告書 墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』浦添市教育委員会、2004年。

⁽¹²⁾ 島津侵攻(1609年)から琉球処分(1879年)の間に造られた墓の呼称。

⁽¹³⁾ 高良倉吉は「南島の墓」シンポジウムにおいて、「歴史研究の方では、残念ながら墓に対する関心はあまりなかった」とし、田名真之も「歴史の方ではこれまで墓についての研究はそれほどなされていないというのが現状」としているが(何れも註2、40頁、46

数の墓敷証文⁽¹⁴⁾や銘書⁽¹⁵⁾を対象とした研究を、現在も着実に積み重ねている。

しかし、民俗学が基軸となってきたとは言え、民俗学内部で見ると、琉球葬墓制研究は決して主流をなすものではなかった。理由には大きく2つあると考えられる。1つは、1960年代に欧米の文化人類学的方法論を用いた沖縄研究が開き始めたとき（後述する）、「門中」を含む沖縄の親族関係が注目されるが、墓など親族集団の象徴的表現から親族を捉えるシュナイダーらの文化人類学的アプローチは未だ日本の研究状況に根付いていなかったためである。よって、葬墓制の研究は主に靈魂観・他界観といった文脈で為されはしたが、膨大な親族組織の研究とは積極的な交渉のないまま平行した面があった⁽¹⁶⁾。理由の2つ目は、柳田や伊波を取り巻いた時代状況と、それ故に民俗学が負った政治性と関連すると思われる。この点を説明するため、以下に沖縄の民俗研究史の概略を示したい。

沖縄の民俗研究史については、筆者が纏めるまでもなく、比嘉春潮⁽¹⁷⁾、宮良高弘・山下欣一⁽¹⁸⁾、最近では赤嶺政信⁽¹⁹⁾などの優れた先人の記述があるため詳細はそちらを参照されたいが、言及すべき画期には2つある。1つ目が1879年⁽²⁰⁾の廃藩置県であり、2つ目が1921年の柳田の来島である。前者により琉球国が日本の一部に組み込まれると、沖縄内外の研究者が研究に着手する。それ以前にも伝聞等に基づいた風俗誌の類がなかったわけではない⁽²¹⁾、現地を実際に踏査して調査研究が行われるのはこの時期である。代表的な在野の研究者に、田代安定、田島利三郎、加藤三吾、笹森儀助、沖縄在住の研究者には、伊波や島袋源一郎がいた。2つ目の画期が柳田の来島とされるのは、先述のとおり、柳田の来島をきっかけに学会レベルでの本格的な沖縄民俗研究が開始されるためである。柳田はこの来島で伊波、比嘉春潮、喜舎場永珣など沖縄出身の研究者と出会い、彼らに学問的刺激を与えると同時に、帰京すると沖縄出身者による研究本を「炉辺叢書」シリーズとして次々に刊行し⁽²²⁾、1922年には「南島談話会」（現在の沖縄文化協会の母体⁽²³⁾）を設立した。

頁）、田名はその数年後に著した「墓—歴史的視点から見た諸相—」（琉球新報社編『新琉球史 近世編（上）』琉球新報社、1992年、283-308頁）において、「近年、歴史の分野でも漸く関心が高まりつつある」と述べている（284頁）。

⁽¹⁴⁾ 墓の造成・入手譲渡経緯や敷地に関する内容を瓦に刻印して焼いて残したもの。瓦証文ともいう。

⁽¹⁵⁾ 方言で「ミガチ」といい、厨子の蓋や胴部などに墨字や線彫で書き記された銘のこと。被葬者の姓名・法名、家号、役職・功績、続柄、生年月日、死去年月日、洗骨年月日、造墓記事などが記される。

⁽¹⁶⁾ 及川高「近代奄美における親族と墓の変容：民俗の変容からみた民衆史の試み」『沖縄文化研究』40巻、法政大学沖縄文化研究所、2014年、241頁。

⁽¹⁷⁾ 比嘉春潮「年月とともに」『比嘉春潮全集』4巻、沖縄タイムス社、1971年、358-9頁。

⁽¹⁸⁾ 宮良高弘・山下欣一「沖縄の民俗研究史」瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス [増補版] —日本民俗学の成立と展開—』ペリかん社、1979年。

⁽¹⁹⁾ 前掲註6。

⁽²⁰⁾ 日本の諸藩は1869年に版籍奉還をしたが、それが琉球国に及んだのは1872年のことで、まず琉球国は「琉球藩」と改称され、1879年に沖縄県に置き換えられた。

⁽²¹⁾ 例えば、新井白石『南島志』。また、王府が施政上の必要から編集著述した史書や由来記類など。

⁽²²⁾ 前掲註6、5頁及び「注5」に、この時刊行された著書が記載されている。

⁽²³⁾ 前掲註6、5頁。

柳田の沖縄紀行は折口信夫にも刺激を与え、折口も柳田の来島と同年に来島し、後に島袋源七や宮城真治など沖縄出身の研究者に影響を与えることになる⁽²⁴⁾。1960年には沖縄出身の上江洲均が琉球大学に民俗研究クラブ⁽²⁵⁾を、1964年に現在の沖縄民俗学会となる沖縄民俗同好会を設立した。これだけを振り返ってみても、柳田が沖縄民俗研究に対して、それも沖縄出身者による研究の出発において果たした役割が甚大だったことが窺える。柳田自身も1921年の沖縄紀行を『海南小記』（1925）として公にし、その後も沖縄研究に積極的に取り組んだ。戦後は直ぐに『沖縄文化叢説』（1947）を刊行して沖縄研究の再出発に着手、1953年には柳田設立の民俗学研究所で「南島総合調査」が実施された。一方で民族学側から企画された『民族学研究』15巻2号の沖縄特集号（1950）にも、柳田・折口はそれぞれ「海神宮考」・「日琉語族論」を寄稿し、民俗学と民族学は沖縄に関して特に親縁関係にありつつ進展していく。そして先述のごとく、1960年代に欧米の文化人類学的方法論に影響を受けた沖縄研究が民族学の側で開け、日本民族学協会による二度目の沖縄特集『民族学研究』27巻1号（1962）、三度目の特集『沖縄の民族学的研究』（1973）、東京都立大学南西諸島研究委員会編『沖縄の社会と宗教』（1965）に、機能・構造論的方法による膨大な研究が蓄積される。1971年から1973年には民俗学会・民族学会を含む九学会連合が調査を実施し、『沖縄－自然・文化・社会－』（1976）が纏められた。しかしこの頃をピークに、その後、沖縄民俗研究は下火になる。戦後直ぐには困難であった海外調査が行えるようになり、研究者の多くが国外へ流出したためである⁽²⁶⁾。そして交代するように興隆するのが、先に述べたとおり、考古学である。

以上が沖縄の民俗研究史の概略であるが、沖縄という土地柄、またその時代を鑑みると、これら研究の背景には純粋な学問的志向以上に政治性が潜んでいる場合があることを忘れてはならない。1つ目の画期であった廃藩置県後、特に本土の研究者によって行われた調査の中には、明白に政策上の目的意識を帯びたものが含まれている。上述の笹森儀助はこうした調査に携わった人物として著名である。明治期の探検家であった笹森は、1893年に政府の委嘱を受けて奄美群島から沖縄本島、宮古・八重山までの島々を巡検し、後に『南嶋探検』を政府に提出した。そこには、琉球国時代在来の租税制度が産業振興の足枷となっている旨分析されるなど、現地産業振興という課題意識に貫かれた視点が表れているとされる⁽²⁷⁾。つまり笹森の調査には、現地の人々の慣習や精神性を分析し、それらの知見をもって産業振興に繋げるという日本政府の目論見が反映されており、所謂植民地主義的性格を帯びるものであった。人類学的研究の持つこのような政治性は、2つ目の画期となる柳田来島以降も決して無縁とはなり得ていない。確かに柳田来島以降、学術的な研究成果が積み上がるのも事実ではある。しかし、何より沖縄を日本の一部と化した歴史が、沖縄学と民俗学を、ともに沖縄人・日本人のアイデンティティ追求の道具へと変貌させてしまったことも、否むべからざる事実である。アイデンティティ追求の営みと一体となっ

⁽²⁴⁾ 前掲註6, 5頁。

⁽²⁵⁾ 機関紙『沖縄民俗』（6号までは『民俗』）を1960年から1986年の24号まで刊行した。

⁽²⁶⁾ 越智郁乃『動く墓－沖縄の都市移住者と祖先祭祀－』森話社、2018年、22頁。

⁽²⁷⁾ 及川高「縮図としての沖縄」島藺進・末木文美士・大谷栄一・西村明編『近代日本宗教史』6巻、春秋社、2021年、190頁。

た両学問の潮流を端的に表す一例が、日本人と沖縄人は同一民族であるという「日琉同祖論」であろう。伊波や沖縄出身の歴史学者・東恩納寛惇は、日清戦争以降の同化志向が高まる中で日琉同祖論に立脚した研究を行っている⁽²⁸⁾。柳田も沖縄が「日本の最も古い姿を今に残している」という、日本文化の祖型を沖縄文化に求める歴史的視点を持っていたことは有名である。柳田が心から日琉同祖論を信じていたかどうかには疑問が挟まれているが⁽²⁹⁾、何れにせよ同氏がそれを強調しなければならなかった背景には、米軍統治下にあった沖縄の帰属をめぐる政治的議論が渦巻く時代情勢があったことには留意する必要がある。日琉が異民族であるため沖縄を片面講和で分離することを文化的に是とする主張に対し、柳田は反論したかったがために『海上の道』(1961)を書いたのだという指摘さえある⁽³⁰⁾。『海上の道』の中心を占めるのは、日本人がどこから来たかを巡る日本人の渡来の問題と、日本人の他界観についての問題であるが、前者について柳田は、日本民族の起源が南島に在り、島伝いに北方へ移住するようになったという「北進説」を主張し、後者について、記紀に表れる根の国・常世の国とは元来海の彼方の楽土であったと、ニライカナイとの関連から説明する。どちらの主張の基底にも、日本文化の深層に潜む南方的要素を捉えようとする、日琉同祖論があることは明白であろう。

葬墓制研究が決して沖縄民俗学において主流をなすものではなかった理由の2つ目が、民俗学の負ったこの政治性と関連すると筆者は考える。つまり、沖縄人の他界観やニライカナイの所在についてでさえ日琉同祖論の文脈で語られる状況において、ましてや洗骨、亀甲墓など、中国や東アジア、オーストロネシア文化圏との関係の中で扱うべき問題について、学術的な議論など積み上がるはずもなかったということである。沖縄民俗学において学術的な葬墓制研究がようやく始まるのは、調査の政治性や他者表象を巡る問題が人文科学諸分野で反省的に検証されるようになった、E・サイードの『オリエンタリズム』

⁽²⁸⁾ 前掲註 26, 20 頁。一方で、伊波は帝国主義は否定しており（並松信久「柳田国男と沖縄文化－『海南小記』と『海上の道』をめぐって－」『京都産業大学日本文化研究所紀要』24 号, 2019 年, 139 頁）、また、沖縄学は日本のナショナリズムに抵抗する手段にもなった側面がある。戦後の沖縄文化協会設立（1947）に関しての比嘉春潮の言葉「この会の設立により、従来資料提供者の立場にあった沖縄研究者が独自に研究発表を始めた」旨の発言や（比嘉春潮『沖縄の歳月』中央公論社, 1969 年, 188 頁）、『民族学研究』15 巻 2 号の沖縄特集号（1950）にて沖縄出身者・金城朝永が編集後記で、「日本文化との類似点のみを拾い出して比べ合わせるが如き、従来の態度」について批判的に書いたことにも、日琉同祖論とは逆方向に働く沖縄人のアイデンティティ追究の精神が滲んでいる。

⁽²⁹⁾ 赤嶺（前掲註 6, 12 頁）は、昭和以降の柳田は沖縄の民俗文化の独自の変化について十分に注意を向けていたと考えており、越智（前掲註 26, 20 頁）も、沖縄には中国や東南アジアなどとの文化的関連があることを知っていた柳田は、戦後一国民俗学の視点を改め、民俗学と民族学の協同を提唱するようになったと述べる。並松（前掲註 28, 155-157 頁）も、「柳田が日琉同祖論を心から信じていたかどうかは不明である」とし、柳田が晩年の書『海上の道』（筑摩書房, 1961 年）においても日本との関係のみで沖縄を位置づけようとしているのは敢えてであり、その後の南島研究の発展を願ったことであつたと論じている。

⁽³⁰⁾ 神島二郎・伊藤幹治編『シンポジウム柳田國男』日本放送出版協会, 1973 年。神島二郎（1918-1998）は柳田に師事した政治学者である。

(1978)以降と言えらるだろう。

2. 琉球葬制の民俗学的研究

とは言え、沖縄の考古学、歴史学の中で最も先発した民俗学において、多くの琉球葬制研究の土台が築かれたことは確かである。琉球葬制に関する民俗学的研究の動向は、3期に分けることができると思われる。1期目が、先に幾度も触れた、欧米の文化人類学的方法論を用いた研究が開かれる1960年代以前であり、2期目がそれ以降から沖縄民俗研究が下火となる1970年代後半、3期目がそれ以降から現在である。この流れに沿い、以下にて琉球葬制に関する民俗学的研究の動向、特筆すべき研究・研究者について通史的に紹介する。なお、特に柳田・折口・伊波の全盛期にあたる1期目や、『オリエンタリズム』以前にあたる2期目の研究には批判的な読みが必要なものも多いが、各研究の政治性の度合いについて触れる余裕は本稿にはない。ここでは一先ず、前章で述べたような民俗学的研究の政治性が琉球葬制研究に及んだことが窺える一事例として、沖縄における風葬文化が古代日本の風葬や^{もがり}殯の「残存形態」だとした論調に触れておきたい。この論調に日琉同祖論や進化論的思考が下敷きとなっていることは言を俟たないであろうが、このような論調は主に日本本土の葬礼研究や他界観の研究をした者に多く、伊藤幹治⁽³¹⁾、和田萃⁽³²⁾、五来重⁽³³⁾などにも見られる。また、先述のニライカナイを根の国・常世の国との関係で論じた柳田・折口の論調も、もう1つの事例として挙げられるだろう。

2-1 1期目（文化人類学的方法論以前）

さて、1期目、琉球葬制研究の口火を切ったのが、先にも触れた伊波普猷の「南島古代の葬制」（1927）である。伊波は収集した県内各地の民俗事例を通時的に位置付け、蓆で包んだ遺体を^{グシヨウ}後生山と称する藪の中に置いて遺族が毎日覗いて霊を慰めたという津堅島の葬法を最も古い型とし、次いで、蓆ではなく棺に遺体を入れて曝し、洗骨して共同の巖窟に入れた久高島の葬法から、柩の上に仮小屋を建てる沖永良部島などの葬法に移り変わったとした。後に横穴に遺体を納めて板戸を付けた墓へと発展し、最終的には仏教や儒教の影響を受けつつ、今日の沖縄でも多く目にするのできる破風墓や亀甲墓に発展したとした。そしてこれらの流れを、「生者と死者がだんだん隔たっていく」という観点で読み解き、死や死者への考え方の変化を示すと指摘した。また、死者に対する恐れ、愛情という相矛盾するものが、沖縄の人々の死生観であるとも述べている。

⁽³¹⁾ 伊藤幹治「古代の葬制と他界観の構造 階層規制による一分析」『国学院雑誌』60巻7号1959年、4-32頁。なお、伊藤は『沖縄の宗教人類学』（弘文堂、1980年）という大著も記している。

⁽³²⁾ 和田萃「殯の基礎的考察」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上、塙書房、1995年（初出は1969年）。各論だが、日本古代の殯で喪屋に籠るのが女性であったとの考察と、沖縄の洗骨が女性によって行われるという事実とに親和性を見出している。

⁽³³⁾ 五来重『葬と供養（新装版）』東方出版、2013年（初出は1992年）。

少し時代は空くが、仲松弥秀はこれを受け『神と村』(1968)⁽³⁴⁾にて、沖縄の祖先や死者に対する考え方の変遷と、それに伴う墓制の変遷を考察し、死者が「神」になる期間が時代とともに4段階を経て長くなったと分析した⁽³⁵⁾。また、死者に対する考え方も、愛情が濃厚だった時代から、次第にそれを畏怖して遠ざけるように変化したと述べる。

原田敏明、桜井徳太郎も3期目に到るまで活躍しているが、葬墓制研究の土台を創った1期目世代の研究者として挙げられるだろう。両氏は本土出身であり沖縄の民俗が専門ではないが、原田は特に沖縄の洗骨習俗について「両墓制の問題」(1959)⁽³⁶⁾や「沖縄と内地の習俗」(1970)⁽³⁷⁾にて論究し、比較的新しい習俗であると主張して、洗骨を縄文後晩期からの伝統を持続するものとした考古学者・国分直一と対立した⁽³⁸⁾。桜井はシャーマニズム研究で著名であり、沖縄の民間巫者・ユタが関与する死の儀礼などを扱った論考も多いが、洗骨についても「宮古島の移葬・洗骨・墓制」(1972)⁽³⁹⁾にて、移住に伴う移葬によって、祖霊観念が高まることで洗骨が定形化されたと述べている。また、本土出身の同世代研究者として酒井卯作もここで挙げておく。酒井は柳田に影響を受け、1965年頃より『南島研究』⁽⁴⁰⁾に多くの論考を寄せているが、1987年に刊行された『琉球列島における死霊祭祀の構造』⁽⁴¹⁾は、フィールドデータに基づいて琉球列島各地の死生観を多角的に分析しており、琉球葬墓制の民俗学的研究における必読の書と言える。

次いで特筆すべき研究者に平敷令治が居る。平敷は3期目以降も『沖縄の祖先祭祀』(1995)⁽⁴²⁾という大著を記しているため1期目世代と必ずしも言えないが、早期の論文として「沖縄の葬制について」(1971)⁽⁴³⁾があり、台湾民族との類似性や、宮古地域に洗骨習俗がない点など、琉球葬墓制に関する重要点を余すところなく指摘した。また、民俗資料のみならず琉球国時代の歴史資料、冊封使や朝鮮人漂流民の記録なども用いる研究手法を採用し、後に亀甲墓の編年まで発表したことから、歴史学、考古学分野にも多大な影響を与えた研究者と言える。

⁽³⁴⁾ 仲松弥秀『神と村—沖縄の村落—』琉球大学沖縄文化研究所、1968年。

⁽³⁵⁾ 1段階目は野辺送りを行っていた時代で、死者はその日のうちに「神」となったが、2段階目では骨化の中で死者の顔が生前のものと見分けがつかなくなった時、3段階目では肉が完全に取れたと考えられた時、4段階目では三十三年忌を経た時となったとする。

⁽³⁶⁾ 原田敏明「両墓制の問題」『社会と伝承』社会と伝承の会、3巻3号、1959年。

⁽³⁷⁾ 原田敏明「沖縄と内地の習俗」窪徳忠編『沖縄の社会と習俗』東京大学出版、1970年。

⁽³⁸⁾ 国分直一「日本及びわが南島における葬制上の問題」『民族学研究』27巻2号、1963年。同「南島の複葬について」『南島研究』8号、1968年。同「シナ海地域の複葬(二)—南西諸島—」『どるめん』5号、JICC出版局、1975年。同「南島と周辺地域—葬制・葬俗における類似と関連—」『歴史公論』118号、雄山閣、1985年など。

⁽³⁹⁾ 桜井徳太郎「宮古本島の移葬・洗骨・墓制—特にクツヲウツヌス習俗について—」『民俗学評論』9号、大塚民俗学会、1972年。

⁽⁴⁰⁾ 本土の南島研究の隆盛から影響を受け、地元沖縄で島袋全発、眞境名安興らによって1927年に組織された「南島研究会」の機関誌。1928年から『南島研究』を発刊したが、財政的事情のため5号で休刊となる。

⁽⁴¹⁾ 酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房、1987年。

⁽⁴²⁾ 平敷令治『沖縄の祖先祭祀』第一書房、1995年。

⁽⁴³⁾ 平敷令治「沖縄の葬制について」『日本民俗学』74号、日本民俗学会、1971年。

平敷と同世代の研究者として特筆すべきには、前出の上江洲均、また、名嘉真宜勝がいる。近年まで活躍する両氏も必ずしも 1 期目世代とは言えないが、沖縄出身の研究者であり 2 期目に分類するには異色であるため、ここで取り上げる。前者は沖縄の蔵骨器である厨子の編年を行ったため現在に至るまで考古学にも影響を与える人物である⁽⁴⁴⁾。名嘉真も多岐に及ぶ葬制研究を行ったが、特に墓の形状を「横穴式」と「平地式」に二分し、それぞれに「洞穴式」「掘込式」、「家形式」「箱形式」という下位区分を設けてその特徴を示した分類図式は、今なお沖縄の葬制研究の基準となっている⁽⁴⁵⁾。

2-2 2 期目（文化人類学的方法論の全盛期）

1960 年代以降、それまでに興隆していた欧米の親族、出自に関する人類学的理論の影響を受けた研究者が沖縄に入るようになり、従来の民俗学研究にはほとんど見られなかった、社会組織や親族組織、祭祀集団や神役の継承、沖縄の父系出自集団「門中」などに注目した研究が見られるようになる。本章で言うところの 2 期目の幕開けだが、前出の『民族学研究』27 巻 1 号（1962）掲載の日本民族学会による沖縄特集、東京都立大学南西諸島研究委員会の編集による『沖縄の社会と宗教』（1965）には当時のその状況がよく表れていると言える⁽⁴⁶⁾。特に「門中」は日本の「家」との比較の観点からも注目を集め、1970 年代から 1980 年代にかけては一種のブームとも言うべき研究状況が訪れる。しかし、先にも触れたが、墓など親族集団の象徴的表現から親族を捉えるアプローチは未だ日本の研究状況に根付いてはおらず、膨大な親族組織の研究とは裏腹に、この時期の文化人類学的な葬制研究は大変に乏しい。ただ、門中の機能的特徴が祖先祭祀にあったため、とりわけ位牌祭祀に関しては若干の研究の交渉が見られる。主眼は位牌祭祀上の禁忌観念や、当該観念が存在しない地方の事例報告などにあったが、このような門中の地域的偏在性を、首里・那覇の士族階層から地方へ伝播した「門中化」現象と呼び、多くの論考が存在する。門中研究の土台を創った研究者は『沖縄の社会と宗教』所収の、常見純一、竹村卓二、大胡欽一、

⁽⁴⁴⁾ 上江洲均『沖縄の暮らしと民具』慶友社、1982 年。

⁽⁴⁵⁾ 名嘉真宜勝『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社、1999 年。

⁽⁴⁶⁾ 『民族学研究』27 巻 1 号の内容構成は以下のとおり。中根千枝「沖縄の社会組織 序論」、伊藤幹治「八重山諸島における兄弟姉妹を中心とした親族関係」、宮良高弘「八重山群島におけるいわゆる秘密結社について」、野口武徳「宮古漁村社会の概況」、関敬吾「琉球村落の親族組織と神人制度—島尻郡兼城村兼城を中心として—」、大故欽一「北部沖縄の社会組織—伊平屋島宇田名の社会人類学的研究—」、クライナー・ヨーゼフ「ノロ祭祀集団における神役の継承—奄美加計呂麻島の場合—」、小川徹「南西諸島における親族呼称」。『沖縄の社会と宗教』の内容構成は以下のとおり。大藤時彦「日本民俗学における沖縄研究史—とくに柳田国男の位置づけと展望—」、常見純一「国頭村安波における門中制度の変遷」、竹村卓二「国頭村宇嘉を中心とする親族体系と祭祀組織」、小川徹「羽地村真喜屋の社会誌学的研究—沖縄本島の先進的水田村落の場合—」、大胡欽一「上本部村備瀬の社会組織」、比嘉政夫「玉城村仲村渠の門中組織」、鎌田久子「宮古島の祭祀組織」、野口武徳「宮古島北部の社会と儀礼」、伊藤幹治「八重山・西表島の親族関係と祭壇の構造と変化」、植松明石「八重山・黒島と新城島における祭祀と親族」、村武精一「八重山・小浜島の西域（wan）祭祀」、鈴木二郎・村武精一「琉球社会組織に関する若干の問題—編者あとがき—」。

比嘉政夫であり、門中化現象の代表的な論者は、山路勝彦、松園万亀雄、笠原政治とされる⁽⁴⁷⁾。その後、門中研究の動向としては、ユタが祖先祭祀の仕方や位牌継承法について教示することで、門中イデオロギーの拡散に大きな役割を果たしたことを指摘する研究に引き継がれ⁽⁴⁸⁾、この流れは、次の3期目に挙げるユタと死者慣行に関する現代の研究に接続していったと思われる。また、門中と位牌祭祀について中国文化からの影響関係の視座の中で扱った近年の研究に小熊誠「門中と祖先祭祀」(2009)⁽⁴⁹⁾があり、現在は波平エリ子が位牌祭祀研究を盛んに行っている。また、先述したとおり平敷も1995年に『沖縄の祖先祭祀』を著しており、フィールドデータのみならず歴史資料に基づきながら位牌祭祀の歴史や地方への広がりを実証的に明らかにし、祖先祭祀研究においては外せない位置を占める。渡邊欣雄も早期から中国や東アジアの関係の中で沖縄文化を論じた人物であり、葬墓制研究に接続するものとして祖先祭祀や風水に関する研究がある⁽⁵⁰⁾。

2-3 3期目（現在）

そして現在、近年の文化研究の傾向である、前章で述べたような叙述の政治性・立場性、或いは、そもそも叙述以前に「正しい文化」とは存在するのかという真正性の問題系を越えた研究が見られるようになり、異種混淆の状況そのものに光を当てる試みや、安易な一般化を避け民俗事象の差異・変容を積極的に捉えようとするものが多くなる。結果、琉球葬墓制においては、現代沖縄の「葬儀の変化」に着目する研究が圧倒的に増えたと言える。例えば、近年の火葬の普及による葬送や死生観の変化、或いは変化せざるものを扱ったものに、赤嶺政信「奄美・沖縄の葬送文化—その伝統と変容—」(2002)⁽⁵¹⁾、加藤正春『奄

⁽⁴⁷⁾ 前掲註6, 15頁と、波平エリ子「位牌祭祀」『沖縄県史 各論編9 民俗』(沖縄県教育委員会, 2020年, 461頁)を参照した。門中化現象論者の原典は以下のとおり。山路勝彦「沖縄・渡名喜島の門中についての予備的報告」『日本民俗学会報』54号, 日本民俗学会, 1967年。松園万亀雄「沖縄座間味島の門中組織」『日本民俗学』71号, 日本民俗学会, 1970年。笠原政治「出自と社会過程—沖縄における『門中』簇生の周辺—」『社会人類学年報』3号, 東京都立大学社会人類学会, 1977年。また、『沖縄の社会と宗教』所収のものについては前掲註46を参照されたい。

⁽⁴⁸⁾ この手の論考は以下のとおり。大橋英寿『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂, 1998年。上原エリ子「民間巫者と門中化との関係をめぐる—考察—位牌祭祀上の禁忌の問題を中心に—」『沖縄の宗教と民俗』第一書房, 1988年。小田亮「沖縄の『門中化』と知識の不均衡配分—沖縄本島北部・塩屋の事例考察—」『民族学研究』51巻4号 日本民族学会, 1987年。犬塚協太「沖縄における家族の「伝統」と「近代」—家族規範に関する「伝統の創造」の諸相をめぐって—」『国際関係・比較文化研究』2巻1号, 静岡県立大学国際関係学部, 2003年。

⁽⁴⁹⁾ 小熊誠「門中と祖先祭祀」『日本の民俗12 南島の暮らし』吉川弘文館, 2009年。

⁽⁵⁰⁾ 同氏の論考は膨大な数に及ぶため、著書に限って代表的なものを以下に紹介する。編著『祖先祭祀』(凱風社, 1989年), 単著『風水思想と東アジア』(人文書院, 1990年), 単著『風水 気の景観地理学』(人文書院, 1994年), 三浦國雄との共編『風水論集』(凱風社, 1994年)など。

⁽⁵¹⁾ 赤嶺政信「奄美・沖縄の葬送文化—その伝統と変容—」国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』吉川弘文館, 2002年。

美沖縄の火葬と葬制—変容と持続—』(2010)⁽⁵²⁾などがある。葬祭業者など「外部機関」の関与によって起きた儀礼体系の再編成や均質化については、葬送儀礼の「外部化」と言われ、加藤正春、津波高志、武井基晃が論じている⁽⁵³⁾。越智郁乃は『動く墓』(2018)⁽⁵⁴⁾にて、本島北部や離島から本島都市圏へ移住した人々の墓の引っ越しに注目し、それに伴う祖先祭祀のありようの変化を描いている。古谷野洋子は『八重山離島の葬儀』(2019)⁽⁵⁵⁾にて、過疎と高齢化によって生活の変化を余儀なくされる八重山諸島における葬儀の現在を描く。また、本土復帰から現在に至るまでの目覚ましい仏教の進出の歴史や、付随する死者慣行の変化について「本土化」と称して論じる筆頭に、鷺見定信がいる⁽⁵⁶⁾。塩月亮子も上記 3 要素（火葬、外部化、本土化）による死者慣行の変容を扱う論考とともに、沖縄における死霊観の変化を災因論の歴史的変遷から考察する論考や、生前から葬法や埋葬地・散骨地を決めるために観光旅行を行う「エンディング・ツーリズム」として沖縄が人気となっている現象を扱う論考など、「死」をめぐる変容や異種混淆の状況を多方面から論究している⁽⁵⁷⁾。

このような種々の変容に伴い、これまで葬儀や祖先祭祀などに携わってきたユタを巡る状況の変化や、ユタの存在意義に着目する研究も多く、前節で触れたユタ研究に続くものと理解できる。鷺見も塩月も葬儀の変容を論じる中でユタと僧侶の関係にも触れており、鷺見は積極的にも消極的にも沖縄の伝統習俗を受け止める寺院僧侶の存在が、本土化だけでなく「沖縄化」という状況を生み出しているとし⁽⁵⁸⁾、塩月もユタと僧侶の接近・共存関係や、一方で相克する関係についてフィールドワークから明らかにしている⁽⁵⁹⁾。ユタはシャーマニズム研究からも着目されてきたため、宗教学的文脈で論じられる傾向もあり、ここに琉球葬制研究と宗教学との接続が見られる。例えば、及川高は、ユタの判示に判断を仰ぐシマの自治組織があるなど、沖縄における「聖」と「俗」の間の線引きは今日もなお不明瞭であ

(52) 加藤正春『奄美沖縄の火葬と葬制—変容と持続—』榕樹書林、2010 年。

(53) 加藤正春「火葬と沖縄の葬儀—火葬の導入による葬儀の再編成とその外部化—」『生活文化研究所年報』17 巻、2004 年。津波高志『沖縄側から見た奄美の変容』第一書房、2012 年。武井基晃「葬送の変化と祖先祭祀行事の自動車社会化—沖縄本島中南部の事例—」『国立民俗博物館研究報告』第 191 集、2015 年。

(54) 前掲註 26。

(55) 前掲註 9。

(56) 鷺見定信「沖縄における死者慣行の変容と仏教」『仏教と民俗：鷺見定信遺稿論文集』ノンブル社、2013 年。鷺見定信・武田道生ほか「沖縄における死者慣行の変容と「本土化」—浄土宗寺院編—」『宗教学年報』25 号、大正大学宗教学会、2005 年。

(57) 塩月亮子「沖縄における死の現在—火葬の普及・葬儀社の利用・僧侶への依頼—」『日本橋学館大学紀要』7 号、開智学園開智国際大学、2008 年。同「沖縄における死霊観の歴史的変遷—静態的社会人類学へのクリティーク—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 91 集、2001 年。同「二人称から三人称、そして一人称の死へ—沖縄におけるエンディング・ツーリズムをめぐる—」『観光コミュニティ学部紀要』跡見学園女子大学、2020 年。

(58) 前掲註 56、2013 年論文、366-367 頁。

(59) 前掲註 57、2008 年論文。

るが、1970年代の「トートーメー論争」⁽⁶⁰⁾や2021年の孔子廟をめぐる違憲訴訟⁽⁶¹⁾の事例は、沖縄社会の中での価値観の葛藤・内的変化を示していると分析する⁽⁶²⁾。驚見とともに「本土化」の追究も行う佐藤壮広は、祖先、即ち死者の声を聞くユタの特性や、ユタが行っている戦死者の供養・平和祈願などの儀礼に着目し、戦争体験の記憶と継承にこうした声を活かすことで「死」を取り込んだ新たな平和学の構築を試みている⁽⁶³⁾。また、宗教社会的文脈において、死者や追悼を巡る現代日本の意識調査に係る研究が行われており、筆頭者の鈴木岩弓は糸満市字摩文仁地区をはじめとする沖縄県における全都道府県の慰霊塔群を取り上げ、「死者に対する関わり方」を分析している⁽⁶⁴⁾。上述したような民俗学側から指摘されてきた現代沖縄の「葬儀の変化」については、宗教学側からも鈴木のように現代日本の葬墓制変容という枠組みの中で論じられており、孝本貢は、沖縄では父系血縁の重視や長男による位牌継承が「理想型」とされるにせよ、現実の家族は分散していかざるを得ない状況に置かれており、現在は調整の狭間にあると述べる⁽⁶⁵⁾。吉野航一も、近親死者への追憶（メモリアリズム）や心的交流などが実際には重視され、位牌・墓の継承も「状況適合的対応」になっていく、との結論を、「外来宗教」⁽⁶⁶⁾信者における祖先祭祀の分析から導いている⁽⁶⁷⁾。

また、上述の流れには沿わないが、特筆せねばならない研究に、蔡文高『洗骨改葬の比較民俗学的研究』（2004）⁽⁶⁸⁾がある。蔡は南西諸島と福建省西部を中心とする南部中国の洗骨改葬を比較分析し、両地域の異同を明らかにしたことから、考古学・歴史学分野にも少なからぬ影響を与えた。

以上のように、琉球葬墓制における民俗学的研究は多岐にわたり、また、時代背景や政

⁽⁶⁰⁾ トートーメーとは現地語で位牌を指す言葉であり、男系出自に基づく直系かつ長子による位牌継承や財産相続に対して、女性の継承権をめぐりメディアを通じて交わされた社会的議論をこう呼ぶ。

⁽⁶¹⁾ 孔子廟の在る敷地が那覇市の所有であったが、市は廟を歴史的・文化的施設と捉え、使用料や賃料等を請求してこず、これを特定の宗教的信念に対し行政が便益を認める政教分離違反にあたるものだとし、市民が市を被告として訴えた訴訟。

⁽⁶²⁾ 前掲註27, 202-207頁。また、及川は奄美群島における葬墓制の変容についてや（前掲註16）、「死者はいかに語るのか」という問いのもと、喜界島でのフィールドワークを通して死者の語りをめぐるモデルを構想する論文「先祖へと収束するカー喜界島における墓制とその語りを貫くものー」（『文化人類学研究』9巻, 2008年）を書いている。

⁽⁶³⁾ 佐藤壮広「「巫者の平和学」試論ー死者の感受と沖縄からの平和祈念ー」『平和研究』32号日本平和学会, 2007年。同「痛みの平和と霊的感受性ー「スピリチュアリティと平和」シンポジウム・レポートー」『国際宗教研究所ニュースレター』48号国際宗教研究所, 2005年など。

⁽⁶⁴⁾ 鈴木岩弓『死者と追悼をめぐる意識変化：葬送と墓についての統合的研究』2002-2004年度科学研究費補助金研究成果報告書（14201004）, 東北大学, 2005年。

⁽⁶⁵⁾ 孝本貢『現代日本における先祖祭祀』御茶の水書房, 2001年, 233-234頁。

⁽⁶⁶⁾ 近世末期から現代にかけて沖縄社会の外部からもたらされた宗教団体（浄土真宗・キリスト教・新宗教）や、スピリチュアリティなどの宗教性を帯びた文化・思想など。

⁽⁶⁷⁾ 吉野航一『沖縄社会とその宗教世界ー外来宗教・スピリチュアリティ・地域振興ー』榕樹書林, 2012年。

⁽⁶⁸⁾ 蔡文高『洗骨改葬の比較民俗学的研究』岩田書院, 2004年。

治性を加味した上で把握することだけでも容易いことではないが、何れにせよ、民俗学が築いたこの広大な裾野に、次に考古学、歴史学が研究を積み上げていくこととなる。

3. 琉球葬制の考古学的研究

既述のとおり、沖縄考古学は「南島の墓」シンポジウム（1986）の時点で葬制において「めざましい発掘成果」が見られると評されて以降、浦添市における近世墓シンポジウム「墓からわかる家族の歴史」開催（2003）、『考古学ジャーナル』での「南西諸島の古墓」特集（2006）、沖縄考古学会での近世墓についての研究発表会の開催（2013）など、現在に至るまで着実に研究成果を積み上げている。エポックとなるこれらのシンポジウムや研究会の名称からも明らかなとおり、近世墓の調査が盛んとなり現在に至っており、「南島の墓」シンポジウム時点で「近世の墓を調査したのは、ごく最近」で「具体的な資料がまだ少ない」⁽⁶⁹⁾とされているのとは隔世の感がある。浦添市におけるシンポジウムは、土地区画整理事業に伴い、そこにあった約 1000 基の近世墓の調査が進行する関係で開催され、発掘成果を基に墓に納められた家族の歴史を復元した事例報告や、家族墓を基本とする沖縄でしばしば確認される一人用の墓の解釈など、様々な議論が行われた。しかし最大の成果は、形質人類学を専門とする土肥直美の人骨についての報告とされる⁽⁷⁰⁾。銘書や文献の残されていない庶民の無縁墓であっても系図を復元できることが示され、以降、葬制研究における人骨調査の重要性が認識されることとなる。2013 年の沖縄考古学会による研究発表会では、近世墓の葬法と形態についての報告や、奄美・沖縄の近世墓から出土する遺物についての報告がなされるとともに、沖縄本島のみならず周辺離島、宮古・八重山諸島、奄美群島の近世墓データの集成が行われ、その後の近世墓研究に基礎的なデータベースを提供した⁽⁷¹⁾。

以上が全体像であるが、前章で述べた琉球葬制の民俗学的研究が煩雑であるのと同様、考古学においても「近年の発掘調査事例の増加に伴い、沖縄の墓に対する研究はますます多様化・細分化して」おり、「墓を巡るテーマは（中略）非常に多岐にわたり、全体像が掴みづらい」⁽⁷²⁾とされている。また、沖縄の葬制の考古学的研究が特に困難な理由が幾つかある。第一に、あまりに墓の形態が多様であり、更にそれらの墓は家族墓を基本とする沖縄では数世代にわたり使用されてきたため、社会階層や時代に共通する形態の抽出が不可能である点がある。第二に、数世代にわたり使用するために墓がしばしば造り替えられるため、現存する姿がオリジナルとは限らない点が挙げられる。第三に、士族の場合着任する領地によって家名が変わる慣習であったため、一見誰の墓か分かりづらく、また、墓は不動産として売買の対象でもあった沖縄では所有者が変わることもしばしばであるため、これら沖縄の慣習が墓の形態と造営主体との関係を見えづらくさせている。極め

⁽⁶⁹⁾ 前掲註 2, 27 頁。

⁽⁷⁰⁾ 前掲註 11, 64 頁。また、前掲註 9, 仁王論文でも、同シンポジウムの紹介にあたりこの点が強調されている（292 頁）。

⁽⁷¹⁾ 前掲註 9, 仁王論文, 292 頁。

⁽⁷²⁾ 前掲註 9, 仁王論文, 292 頁。

つきの第四は、沖縄戦で墓が壕として利用されたために相当数の墓の内部形態、外観が変形・破壊されてしまったことである。これら研究上の困難を念頭に、以下で考古学が明らかにしてきた琉球葬制の通史を、関連する研究とともに記述することで研究史の概要を示していきたい。なお、以下の記述の多くを宮城弘樹の論考⁽⁷³⁾に頼った。

琉球列島の先史時代の葬地として、主に砂丘の居住域付近に立地する土壙墓と石灰岩の洞穴岩陰を利用する風葬墓が知られている。風葬墓についての考古学的関心の初期的な報告に坪井正五郎「琉球横穴」(1901)⁽⁷⁴⁾があり、土壙墓については、国分直一が「シナ海諸地域の複葬」(1975)⁽⁷⁵⁾にて奄美・沖縄を湿葬地帯ではなく乾燥葬地帯としているが、何れも見られるというのが現在の通説のようである。嵩元政秀、当真嗣一も「考古学より見た南島の葬制について」(1981)⁽⁷⁶⁾にて、土葬が決して特殊ではなかった旨既に述べている。墓域と集落ははっきりと区別されており、更に墓域は共同体によっても分けられていた⁽⁷⁷⁾。

11世紀から16世紀は考古学ではグスク時代(文献史学では古琉球)と時代区分するが、10世紀から12世紀頃、墓制は、I期火葬墓→II期焼骨改葬墓・伸展葬木棺墓→III期屈葬土壙墓と変化していった事例がある一方(喜界町城久遺跡群)、洞穴を利用した風葬もあり(喜界島長石の辻遺跡)、16世紀を遡る事例として岩陰に礫を積み、囲い込まれた空間で風葬したものが散見している(南城市サキタリ洞穴 SX4、那覇市首里城跡右掖門、那覇市銘苅墓跡群 B2 区 4 号墓)。瀬戸哲也(2009)はこれらの遺跡から、グスク時代始めは土壙墓における屈葬があったが、14世紀には崖葬墓が登場し、墓口の形成、改葬、蔵骨器納骨という行為もこの頃にかけて始まったと想定し、こういった崖葬墓が後続する所謂「琉球墓」の系譜の古体であるとする⁽⁷⁸⁾。西銘章(2004)はこれを「定形化」と呼称する⁽⁷⁹⁾。一方、宮古・八重山諸島には、サンゴや石灰岩などの平石を並べた石棺状の遺構や、土坑に石を配した配石墓が見られ、これが後に方形に石を積み上げて露出する墓に繋がるが、在地の領主やノロなど特別な人物の墓制として16世紀頃まで存続していたと目されている(石垣市野底遺跡、宮古諸島のミャーカ、竹富島西塘など)。また、前章で述べた蓆や棺に遺体を入れて骨化させたという伊波の報告した古体の葬法は、考古学的には判然としないという⁽⁸⁰⁾。自然の岩陰を葬地として利用するのは王族・上級士族も同様であるが、敷地面積が広く、大規模な石造のものとなる(那覇市首里玉陵(玉御殿)、天山陵、浦添よう

⁽⁷³⁾ 宮城弘樹「琉球列島(沖縄・奄美)」(『季刊考古学』149号, 2019年)、「葬制と葬送儀礼を考える 沖縄」(『季刊考古学』150号, 2020年)「墓制から紐解く近世琉球社会」(『近世大名の葬制と社会』雄山閣, 2022年)。

⁽⁷⁴⁾ 坪井正五郎「琉球横穴」『人類学雑誌』17巻188号, 1901年。

⁽⁷⁵⁾ 国分直一「シナ海地域の複葬—南西日本の複葬(1)—」『どるめん』3, 1975年。

⁽⁷⁶⁾ 嵩元政秀・当真嗣一「考古学より見た南島の葬制について」『南島研究』22号, 南島研究会, 1981年。

⁽⁷⁷⁾ 前掲註2, 21-22頁。

⁽⁷⁸⁾ 瀬戸哲也「沖縄・グスク時代の葬制」『日本の中世墓』高志書院, 2009年。

⁽⁷⁹⁾ 西銘章「沖縄における葬制の変化—近世墓研究ノート—」『南島考古』23号, 沖縄考古学会, 2004年。

⁽⁸⁰⁾ 前掲註73, 2020年論文, 94頁。

どれ、上里墓（沢岬親方の墓）、小禄墓、百按司墓、伊是名玉御殿など）。しかし、王陵の初期（13世紀後半から15世紀前半頃）は岩陰に木槨を建築したと推定されており、安里進（2010）は王陵の墓形式の変遷も民俗学的に為された墓の変遷（洞穴墓・岩穴圀込墓→掘込墓→破風墓・平葺墓→亀甲墓→平地式）と同様であるとしながらも、各型式の墓の中で典型的かつ出現年代が最古なのが王陵であるため、王陵は沖縄の墓の1つではなく、むしろ祖型と位置づけられるべきとする⁽⁸¹⁾。また、玉御殿はシルヒラシ⁽⁸²⁾を取り込んだ墓室構造をしており、玉御殿以外でこれを取り込んだ初出とされるのが上里墓（16世紀）であるが、この頃より王族・士族の墓において厨子を安置する「棚」も同時に出現し始めることが指摘されている。こういった墓室構造の分析、棚の形態的分類と編年を行ったのが仁王浩司（2015）⁽⁸³⁾であり、仁王は、墓室構造が18世紀を境に大きく変容することを指摘し、この背景には昭穆に基づく厨子の安置を可能ならしめる意図が読み取れ、儒教の受容が反映されていると示唆している⁽⁸⁴⁾。

17世紀の後半より亀甲墓が中国から伝わる。亀甲墓については平敷も編年を示したことは先にも触れたが、島弘（2007）⁽⁸⁵⁾も編年を発表している。既出の小熊誠（2013）も福建における亀甲墓と沖縄のそれとを比較し、沖縄独自の意匠について指摘した⁽⁸⁶⁾。概ね、横穴の墓室を設け家族墓として使用するのが在来の伝統で、屋根を亀の甲羅様とする外形的な部分が中国由来と理解されている。また、文献資料から明らかにされたことではあるが、この時代、墓地面積は王府により管理されており、康熙33年（1694）には造墓に際して届出が義務付けられ、雍正13年（1735）には令達によって身分に応じた面積が定められ、嘉慶14年（1809）には外観意匠も身分により規定される。庶民に亀甲墓造りが許されるのは1879年の廃藩置県後であり、それまでは依然、自然洞穴や岩陰を利用するものであったと考えられている。18世紀中頃から19世紀にかけては、洗骨改葬を行い厨子に遺骨を入れて掘込墓に安置する型が地方にまで浸透し、士族層では『四本堂家礼』（1736）など、本土でいう『朱子家礼』に相当する書が参照されたため、葬制が琉球全体で斉一化すると理解されている。20世紀中頃には火葬が普及し現在に接続していくため、風葬・洗骨などを伴う所謂「琉球墓」普及の契機は近世期にあり、その意味でも近年考古学が近世墓を重視する意味が解される。

なお、葬制において考古学が扱う対象として副葬品や墓標なども挙げられるが、議論が広がりすぎる嫌いがあるため、本章では最後に、十分に研究史の厚い厨子についてのみ触れ

⁽⁸¹⁾ 安里進「てだがあなの王宮：沖縄の墓と王陵の思想」『International Journal of Okinawan Studies』（2号）、琉球大学国際沖縄研究所、2020年、3頁。また、同氏による王陵についての論考が多数ある。

⁽⁸²⁾ 改葬前の遺体安置所とされる空間。

⁽⁸³⁾ 仁王浩司「沖縄の墓の墓室構造について—本島中南部にみる墓室構造の変遷—」『よのつち浦添市文化財紀要』11号、浦添市教育委員会、2015年。

⁽⁸⁴⁾ 前掲註9、仁王論文、300頁。

⁽⁸⁵⁾ 島弘「外観より見た亀甲墓の編年」『銘苅古墓群 那覇市文化財調査報告書』27集、那覇市教育委員会、2007年。

⁽⁸⁶⁾ 小熊誠「沖縄と福建における亀甲墓の対比—外部意匠の比較を中心として—」『国際常民文化研究叢書』3号、神奈川大学、2013年。

たい。厨子の研究は、先にも触れたが上江洲均が発表した編年（1982）⁽⁸⁷⁾を端緒とし、その後、考古学において型式学的検討が行われている状況である。編年の概略は註⁽⁸⁸⁾に示す。ボージャー厨子と、マンガン釉を掛けた厨子の分類・編年は安里進（2006・1997）⁽⁸⁹⁾、陶製の御殿形厨子については宮城弘樹（2020）⁽⁹⁰⁾、石厨子については関根達人（2022）⁽⁹¹⁾と宮城（2022）⁽⁹²⁾が行っている。また、特に宮城は科学研究費助成事業を受けて琉球列島の発掘墓資料の集成を行い、厨子約 4000 点と銘書約 4400 件の一覧の資料集を刊行し（2021）⁽⁹³⁾、研究の環境整備を行った点からも特筆される。そしてこの銘書の一覧については、次章で述べる歴史学における葬墓制研究においても貴重なデータベースとしての位置を占めると言える。

4. 琉球葬墓制の歴史学的研究

歴史学における琉球葬墓制研究は、前述のとおり 1990 年代時点で「ようやく葬墓制について関心が高まりつつある」という自己認識であり、民俗学、考古学に比して最も後発する。その理由は、「史料から墓型やその変遷を辿ることはそう容易なことではない⁽⁹⁴⁾」という、琉球葬墓制研究の権威の 1 人、玉木順彦の言葉に尽きると思われる。墓型について詳細に記した史料は少なく、また、史料が遡りうる時代には限度があり、更に史料の記事が普遍性を持つ内容であるかという問題もある。また、沖縄戦で多くの史料が失われて研究が困難となっているのは、歴史学こそ深刻であることも理由に挙げられよう。ただ、前

⁽⁸⁷⁾ 前掲註 44。

⁽⁸⁸⁾ 15 世紀から 17 世紀中頃に王族・有力者の間で、漆塗りの板厨子や、中国産の輝緑岩性石厨子が使用され始め、17 世紀中頃から 18 世紀前半に在地のサンゴ石を利用した石厨子が広がり、崖葬墓や掘込墓には甕型のボージャー厨子と呼ばれる厨子も多く見られるようになることから、この頃に洗骨改葬が定着したと考えられている。次に赤焼御殿型と呼ばれる瓦質、もしくは陶器質の厨子が登場し、士族・百姓間ではボージャー厨子に代わってマンガン釉を掛けた甕形のものが登場する。赤焼御殿型も荒焼、上焼御殿型へと代わる。20 世紀中頃に火葬が定着すると火葬用骨壺が登場すると共に、コバルト掛け御殿形厨子と呼ばれるものも登場した。戦後には火葬用骨壺化に伴い厨子が小型化する。

⁽⁸⁹⁾ 安里進ほか「ボージャー厨子の分類と編年」（『比嘉門中の家族史・比嘉門中墓の調査概要』浦添市教育委員会、2006 年）。安里進「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者―近世墓の考古学的調査による家族復原―」（『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』浦添市教育委員会、1997 年）。

⁽⁹⁰⁾ 宮城弘樹「御殿形厨子の研究（2）―赤焼・荒焼御殿形厨子の編年―」（『南島考古』39 号 沖縄考古学会、2020 年）と、「御殿形厨子の研究（3）―上焼御殿形厨子の編年―」（『総合学術研究紀要』22 巻 1 号、沖縄国際大学、2020 年）。

⁽⁹¹⁾ 関根達人「石厨子の基礎的研究」『日本考古学』54 号、日本考古学協会、2022 年。

⁽⁹²⁾ 宮城弘樹「御殿形厨子の研究（5）―石灰岩・サンゴ石製石厨子の編年―」（『総合学術研究紀要』23 巻 2 号、沖縄国際大学、2022 年）。

⁽⁹³⁾ 宮城弘樹『琉球葬墓制資料集成（1）―厨子（蔵骨器）編―（葬墓制からみた琉球史に関する基礎的研究 研究成果報告書）』、同『琉球葬墓制資料集成（2）―銘書編―（葬墓制からみた琉球史に関する基礎的研究 研究成果報告書）』2018-2020 年度科学研究費補助金 研究成果報告書（18K00981）、沖縄国際大学考古学研究室、2021 年。

⁽⁹⁴⁾ 前掲註 2、211 頁。

章で述べた県下市町村含む考古学の発掘報告の増加に伴い、墓碑⁽⁹⁵⁾、墓誌、銘書など、文献以外の資料も増えたことで、近年、考古学と軌を一にしながら葬制研究が発展していると言える。このような全体像のもと、以下でもう少し詳述する。

特筆される早期の琉球葬制に係る研究者には、先ず、真境名安興がいる。真境名は『沖縄一千年史』(1923)⁽⁹⁶⁾を著し、『稗官雜記』や『使琉球録』など朝鮮や中国の歴史資料から葬制に関する記事を抽出し、16世紀から17世紀にかけての琉球の葬法、墓地規制、墓型の変遷にまで論究している。その後、歴史学者は後続せず、次に特筆されるのは伊波普猷「南島古代の葬制」(1927)となる。この著については既述したが、伊波はこの中で『随書』琉球伝⁽⁹⁷⁾や『使琉球録』、朝鮮人漂流者の記録の含まれる『成宗実録』などの史料を通して、野外風葬からの墳墓の変遷、死者を逆さにして四辻に埋める特殊葬法や葬式の時のノロのウムイ⁽⁹⁸⁾などの資料も紹介したため、歴史学においても重要視される。同様に、民俗学者・小川徹も、「沖縄における若干の墓型とその年代」(1987)⁽⁹⁹⁾において、沖縄の士族である麻氏の家譜や王府史料などから墓型の変遷を実証的に追ったために注目に値する。上江洲敏夫は『四本堂家礼』と沖縄民俗－葬礼・喪礼について－(1984)⁽¹⁰⁰⁾にて、『四本堂家礼』を中心に、王府が布達した服喪制度である『服制』と、嘉徳堂という堂号の池宮家の規範を書き留めた『嘉徳堂規模帳』を参考に、近世の久米村⁽¹⁰¹⁾における葬礼・喪礼を明らかにし、現行習俗との関わりについても検討を加えた。

1986年開催の「南島の墓」シンポジウムには、歴史学からは高良倉吉、田名真之、既出の玉木順彦が出席しており、彼らが次に注目すべき世代と言える。高良は琉球王国史が専門であるが、特に第二尚氏王統に係る墓所である伊是名玉御殿について1980年代から論述しており、2005年には同墓の内部調査に漕ぎつけた。考古学、歴史学、建築学、美術工芸の分野から研究者が集まり実施された同墓の調査成果は、『首里城研究』9号(2006)⁽¹⁰²⁾に記されている。文献資料との整合性や齟齬の確認、齟齬の生じた背景の考察も行われているが、それ以上にこの調査の最大の意義は、琉球古墓の大半が内部調査を行えないまま放置される中、王統に係る重要墓の墓室内部を明らかにしたことであると言える。田名も「南島の墓」シンポジウム時点では墓を専門としてはいないと述べているが⁽¹⁰³⁾、その後、

⁽⁹⁵⁾ 沖縄県教育庁文化課の編集した『金石文－歴史資料調査報告書V－』(沖縄県教育委員会, 1985年)は、県下の廃藩置県以前の金石文の調査報告であり、調査対象に墓碑も含まれていることから、歴史学において必携の書となっている。

⁽⁹⁶⁾ 真境名安興『沖縄一千年史』沖縄郷土研究会, 1923年。

⁽⁹⁷⁾ 記載された琉求が沖縄を指すものか、台湾を指しているのか定説がない。記載によれば、当時(7世紀頃)は土葬が行われていた。

⁽⁹⁸⁾ 儀式歌の意。

⁽⁹⁹⁾ 小川徹「沖縄における若干の墓型とその年代」『近世沖縄の民俗史』弘文堂, 1987年。

⁽¹⁰⁰⁾ 上江洲敏夫「『四本堂家礼』と沖縄民俗－葬礼・喪礼について－」『民俗学研究所紀要』8号, 成城大学民俗学研究所, 1984年。

⁽¹⁰¹⁾ 那覇港の近くに形成された渡来中国人の集落をルーツとする中国人居留地。明朝が琉球を海上貿易上の受け皿として優遇すべく公的に派遣した中国人職能集団や、その子孫たちも居住した。

⁽¹⁰²⁾ 『首里城研究』9号, 首里城公園友の会, 2006年。

⁽¹⁰³⁾ 前掲註2, 46頁。

『新琉球史 近世編（上）』（1992）にて「墓－歴史的視点から見た諸相－」⁽¹⁰⁴⁾を書き、前出の浦添市における近世墓シンポジウム「墓からわかる家族の歴史」（2003）においても「近世の士族の墓」と題する基調報告を行っており、琉球葬制研究に係る歴史学者として代表的な地位を築いたと言える。同氏の為した指摘としてその後も影響力のあったものに、「家譜の編纂」が琉球葬制に及ぼした影響という観点があったように思われる。王府の役所の1つに系図座というものができ、1700年頃から士族層の系図（家譜）の管掌をしたことが知られているが、これを機に琉球社会に系譜的繋がりや血筋意識といったものが生まれ、門中の形成、ひいては同じ墓に葬られるべき人についての規制の意識に繋がったという。また、沖縄には墓が一杯になると墓を閉じて「神御墓」とし、新たに「当世墓」を造る慣習があることも知られるが、田名は第一尚氏末から第二尚氏初め頃にかけて始祖を持つ古い士族層において、墓が一杯になり当世墓を造る必要性に迫られたのも17世紀末から18世紀の初めにかけてであることを指摘し、系譜を意識して墓を整理する時代を迎えたことを示した。こういった観点の導入もあり、17世紀末から18世紀初めというのが琉球葬制において大きな転換期に当たる、というのが歴史学における共通認識のようである。高良も示唆したことだが、誰を葬ったか分からない抽象的な祖先の墓が、時代が下るにつれ被葬者が特定できる墓となってくるが⁽¹⁰⁵⁾、田名はこうした「被葬者の特定化」という変化も17世紀に入って一般士族に、百姓層にはもっと後代に広がったと時代観を述べる⁽¹⁰⁶⁾。前章で触れた仁王も墓室構造が18世紀を境に大きく変容することを指摘したが、考古学において近世墓が重視されるのと同様、歴史学においても近世を肝とする。

玉木は歴史資料から葬制に関する記載を抽出し、考古学による発掘報告や民俗資料も参照してクロスチェックを行いつつ葬制について多くを論じている。特に同氏の洗骨や火葬などの葬法に関する実証的な考察は琉球葬制研究において非常に示唆に富むため、註⁽¹⁰⁷⁾にて紹介する。

近年の歴史学的研究で特筆されるのは、福地有希による「首里玉御殿の存在意義に関す

⁽¹⁰⁴⁾ 前掲註 13。

⁽¹⁰⁵⁾ 前掲註 2, 42 頁。

⁽¹⁰⁶⁾ 前掲註 2, 49 頁。

⁽¹⁰⁷⁾ 洗骨について、玉木は朝鮮や中国の歴史資料から、死後約10日後に親族らが柩の置かれた喪屋に参集して泣きながら皮膚をえぐって流水で洗ったという記述を紹介し、既出の土肥直美による浦添ようどれやナカダカリヤマ古墓群での調査によって確認された、死後に受けた刃物によると思われる傷跡のある人骨は上述の文献を裏付ける旨述べる（玉木順彦「古琉球の葬制」『沖縄県史 各論編 3 古琉球』沖縄県教育委員会、2010年、553頁）。琉球で洗骨が開始される時期は不明としながらも、宮古島の地方役人『白川氏家譜』などの記述（1765）からは、二次的処置がなされず一次葬で終わる葬法が読み取れるとし、洗骨習俗を伴う改葬は比較的后代の発生とみて差し支えないものと考えられると論じている（前掲註 2, 232 頁）。琉球における火葬については、文献資料（羽地家の『家之伝物語』）に表れる洗骨時に火葬を行った旨の記述（1618）を、土肥による上述の両墓での火葬骨と焼骨の確認報告によって裏付け、既出の蔡文高による南部中国の洗骨習俗の研究報告を参照することで、「洗骨改葬習俗とともに、（洗骨の一手段としての）火葬が受容され、沖縄の習俗に副って変容したものが、近年の古墓調査で確認事例が増えている焼骨では」と考察している（前掲玉木論文、2010年、554頁）。

の一考察—『王代記』に見る被葬者認識の変遷を手がかりにして—」(2008)⁽¹⁰⁸⁾と思われる。同氏は第二尚氏王統の陵墓である首里玉御殿での使用方法が時代により変化したことを論じており、例えば1751年には別所に葬られていた王妃や継妃などを首里玉御殿に移葬し、1759年には46か所にわたって葬られていた王族の中で首里玉御殿に葬るべき人を選定し、移葬していることを明らかにした。これは、上述した田名による神御墓・当世墓についての指摘にも接続する研究と言うことができ、正に18世紀にかけて系譜を意識して墓を整理する時代に入ったということを例証している。また、尚家文書などを用い、近世の王家における廟制に関する研究も多々見られ、先駆者は豊見山和行と言えるが、近年の代表的な論者に麻生伸一、前村佳幸がいる⁽¹⁰⁹⁾。廟制研究は、近世琉球の系譜観念や祖先祭祀の思想と様態、それらと儒教や仏教との関わり、また、中国や東アジアとの異同等、多方面に波及する論題であり、今後の研究の広がり期待される。

最後に、銘書研究について付言しておく。厨子や石棺などに記される銘書は、琉球葬制研究において歴史学の持つ数少ない研究対象資料の1つと言え、これまでも家譜と照合することで被葬者の家族の歴史や墓の歴史を復元することに貢献してきた。しかし大半が墓を開けないと手にできない資料のため、これまでの研究は散発的なものとならざるを得なかったと言える。しかし、前章で述べたとおり、宮城弘樹は銘書約4400件を集成して一覽の資料集を刊行したため、今後、群としての銘書を対象として様々な研究に繋がっていくことが期待される。銘書を活用した新しい研究アプローチに、死去年を抜き出し、王国時代の人口推移に迫ろうとする宮城自身による試みがある⁽¹¹⁰⁾。考古学による琉球葬制研究の高まりと関連し、歴史学における研究もまた新たな局面に入ったと言える。

おわりに

本稿では、琉球葬制研究を民俗学、考古学、歴史学に区分し、各分野及び隣接諸科学での研究動向を紹介した。葬制研究の射程の広さもあり、分野を区切ってもなお多様な研究を上手く記述できたとは到底思えないが、「全体像が掴みづらい」と研究者自身が述べてしまう⁽¹¹¹⁾この領域の、若干の整理の助けとなっていればと思う。また、「南島の墓」

⁽¹⁰⁸⁾ 福地有希「首里玉御殿の存在意義に関する一考察—『王代記』に見る被葬者認識の変遷を手がかりにして—」『首里城研究』10号、首里城公園友の会、2008年。

⁽¹⁰⁹⁾ 例えば、豊見山和行「祭天儀礼と宗廟祭祀からみた琉球の王権儀礼」(『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館、2004年(初出は1992))、麻生伸一「先王祭祀と琉球王権—琉球国王末期の廟制から—」(『沖縄文化』52巻1号、2019年)、前村佳幸「近世琉球の先王廟と宗廟における昭穆観念」(『琉球大学教育学部紀要』91号、2017年)、「琉球王朝末期の廟議」(『沖縄文化研究』47巻、法政大学沖縄文化研究所、2020年)、「尚家文書「周九廟之図并円覚寺御廟之図」の研究(上)」(『琉球大学教育学部紀要』97号、2020年)、「尚家文書「周九廟之図并円覚寺御廟之図」の研究(下)」(『琉球大学教育学部紀要』98号、2021年)など。

⁽¹¹⁰⁾ 宮城弘樹「厨子銘書からみた近世琉球の人口動態」『沖縄国際大学社会文化研究』13巻1号、2023年。

⁽¹¹¹⁾ 前掲註72。

シンポジウムにおいては「今日なお民俗学の分野からの研究が大勢を占めている⁽¹¹²⁾」とされていた本領域が、現在では考古学・歴史学が優勢となっている状況にアップデートすることは、少なからずできたのではないかと考える。本稿が、少しでも琉球葬墓制の学際的研究の進展に役立てば幸いである。

謝辞

本稿執筆にあたり、考古学的研究動向に関して宮城弘樹氏（沖縄国際大学）に、歴史学的研究動向に関して山田浩世氏（沖縄県教育庁）にご教示いただくとともに、原稿を読んでいただき、貴重な助言をいただいた。感謝の意を込めてここに記したい。

⁽¹¹²⁾ 前掲註 2, 208 頁。